

近世中期の撰関家における漢語由来考証の手法とネットワークの研究

柚木 靖史 教授 (YUNOKI, YASUSHI 人文学部日本文化学科)

鎖国時代の京都にも、海外の最新の言語や文化に精通した人々がいました。

柚木研究室では、江戸時代中期の近衛家当主・家熙の口述及び行状を、同家に侍医として仕えた山科道安(やましな・どうあん)が聞き書きしたとされる『槐記(かいき)』について、新たに〈近世日本における漢語語彙(ごい)研究の重要資料〉としての有用性を提起することを目的とした調査研究に取り組んでいます。

『槐記』を資料とした研究は、従来、有職故実をはじめ、茶湯、香道、花道、本草、医術など多様な分野で実施され、それぞれに優れた成果が報告されてきました(参考文献1~4)。近年の研究では、山科道安自筆と推定される原本の詳細が明らかにされる(参考文献5)等、本書の書誌及び内容に関する極めて重要な報告が提出されています。

一方で、書中に度々記載される漢語語彙に関する考証については、語学的な観点からの専門的かつ総合的な研究が行われておらず、既存の注釈研究成果についても、漢語語彙の考証に関する言説等を省いた抄本(しょうほん)が、比較的普及しています。『槐記』の存在は漢語語

彙研究分野に直接関係するものとして知られておらず、同分野の研究資料としての有用性を秘めたまま今日に至るのです。

また、『槐記』の全注釈は半世紀以上前になされているのですが、漢語語彙が注釈対象として網羅されない等、多くの課題が残されていました。



私たちの研究では、具体的には次の①から④の実施を目指しています。

- ①『槐記』語彙索引の作成
- ②『槐記』の語彙の特徴の分析
- ③近衛家熙に関わる漢語語彙研究集団による考証方法の解明
- ④『槐記』語彙の総合的な注釈の作成

近世中期の京都における、近衛家を中心に行われた漢語考証の源泉及び手法(参考文献及

び人的ネットワーク)及び有効性(言説の妥当性)について究明するとともに、近世後期以降の日本における漢語語彙研究への影響の有無及び程度についても明らかにしたいと考えています。更に、全注釈が刊行されて以降に実施された漢語語彙を含む諸分野における新たな研究成果を反映させることにより、総合的かつ最新の注釈書を完成したいと考えています。

『槐記』の詳細を全巻にわたり検討することで、鎖国下における近世日本の漢語由来の考証の一端を解明することにより、日本語史研究の発展に寄与したいと願っています。

(参考文献)

1. 史料大観『槐記』(哲学書院 明治33年)
2. 『槐記注釈』上・中・下(立命館大学出版部 昭和12年)
3. 茶道古典全集第五巻「槐記」(淡交社 昭和33年)
4. 日本古典文学大系『近世随想集』(岩波書店 昭和40年)
5. 川崎佐知子「『槐記』山科道安自筆本焼失次第」(立命館文学(630) 平成25年)

先人が取り組んでいた漢語学習の手法とネットワークを明らかにすることにより、日本における外国語学習の歴史と未来に新たな視点を提起したい。